

浄土

1981-9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十六年八月二十五日印刷 昭和五十六年九月一日発行
第四十七卷 第九号



1981

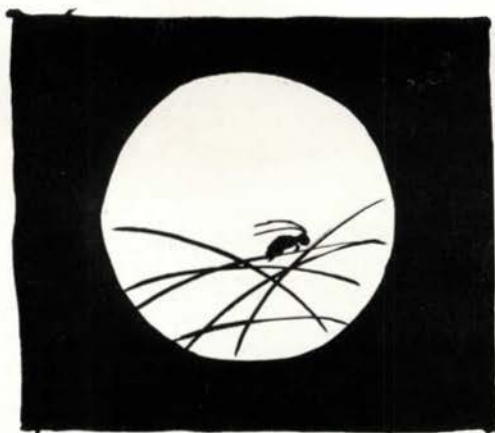
郷

誌

K. Oishi

「いのち」の洗濯をしよう

さる八月三日、掛け替えない友人の計報をうけた。殊のほか暑さが応えたのかもしれない。三十三歳の若さで逝ってしまったのである。



「江差追分」で有名な道南の町、江差出身の彼は、向学の意に燃え、四十年代初頭に上京し、大正大学に学んだ。

在家の生まれであったが、仏縁めぐり、横浜にある本宗の寺に随身し、仏飯を食み、寺役を手伝いながら勉学をつづけたのである。

その彼の生活ぶりは、まことに実直にして堅実そのものであった。また、朴訥とした話し方には、妙に説得力があった。「長谷川さん、それはですね……」と、やられると、もうまいったである。先輩後輩もない、主客転倒し、彼の話に聞き入ることもしばしばであった。

「天は二物を与えず」の譬えではないが、そんな彼にも、大きなハンデがあった。心臓にやや欠陥があったのである。周囲も気づかったが、心配は無用とのことだった。五年間の横浜での生活でも、病らしい病はなく、大過なくすごしていた。

その証拠に、江差町の役場に就職した彼から、吉報が届くまでに時間はかからなかった。

た。帰郷してから二年ほどで、第二の人生を歩み出したのである。

やがて、二人の父親となった。そして、念願のマイホームを手にしたのである。

そんな矢先の夭逝であった。

彼の質実からみて、決して無理をしたとは思われない。しかし、彼の夢がふくらむにも増して、病魔の冒進するどく、ついに不帰の人となってしまうのである。

最愛の妻子を残して、逝かざるを得なかった彼の心情を思うと、何ともやるせない思いにかられてしまった。そして、人の生きざま、死にざまとは何か、つくづく考えさせられたのである。

今日のような喧噪の社会にあっては、またすべてに恵まれた生活の中では、生命を考える余裕もなければ、必要性もないかのようにとられがちである。だが、与えられた生命はただ一つしかない。尊い預りものであることを考えると、あだや疎かにはできない。「いのち」のちあつての物ダネである。

前回につづき、あえて「いのち」の洗濯を勧めたい。

(長谷川宣丈)

九 月 号



もし定散なくば、何ぞ念仏の
特り秀でたることを顯さん。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.173—4)

目 次

＝法然寺復興＝

- 「万灯会」のことなど……………細 井 俊 明……(2)
 お彼岸を迎えるにあたって……………桑 山 春 山……(6)
 <随想> ほとけとの出会い(十四)……………佐 竹 隆 三……(10)

■随想■

- 小砂利の山……………木 下 隆 一……(15)

シルクロード・敦煌編

- 一十七窟の謎……………築 地 泰 賢……(25)
 『法然上人文状』覚書……………石 畠 俊 徳……(34)
 一阿弥陀護摩一七箇日支度事一

<童話シリーズ>

- おひがんせんべい……………布 村 哲 哉 ……(20)

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(30)

- <表紙のことば> 郷愁……………大 西 耕 三……(32)

- <表紙裏・巻頭言> いのちの洗濯をしよう ……長 谷 川 宣 丈

- 念仏ひじり三國志⑧——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(38)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

法然寺復興

「万灯会」のことなど

昭和三十八年、生れ育った京都から、父母の故郷の寺
香川県仏生山法然寺へ帰ってきたのは、法然上人の七百
五十年の大遠忌から二年目である。翌三十九年住職就任
も、父である二十七世照道上人が元氣であるし、訳の分
らぬくらい、だだっ広い境内と、数々の古色溢れる堂宇
樓門に、何をしてよいかわからず、ただひたすらがんじき
を持って掃除に励みつつ、小便臭いボイースカウトの子
供相手の毎日は、もう俺の人生は三十年で終った、これ
から生きるすべもないが、まかされた以上何かをして、
このお寺を何とかせねばという漠然とした日々だった。
京都で多少習い憶えた、知恵遅れの子供達の学園を造ろ



ほそ い しゅん みよう
細 井 俊 明

(高松市法然寺住職)

うと、あっちへ走りこっちへ走りの毎日だった。そうこ
うするうちに、昭和四十年四月一日、知事の認可が下り
て、精神薄弱児施設竜雲学園が始まった。

始めてみるとこれが、大変な仕事、当初の建物は木造
で、中学校の廃校を移転したもの。

香川県は、当時の知事の趣味もあってか、建物は、県
庁、文化会館、武道館、体育館とどれをとっても皆立
派。おまけに、学力日本一のエリート熱心、精薄児も、教育
出来るものは、養護学校へ。学園へ入ってくる児は、超
重度の子供達か、何かの理由で学校の特級学級へ行けな
い子。そんな子供達が、どっと四十名も入って来た。設

立当初は園児が一せいに自分自分の方向へ動きだす。くもの子を散らす。一日中それを繰り返す。だから、木造の出来たてとはいえ、設立基準に合っているというだけの汚い園舎（私には金殿玉楼に見えた）の生活は、精薄児の学園の正規の職員の数や不慣れさでは、とても間に合わず、毎日のように出る無断散歩の園児を捜す役目は、ボーイスカウトの少年達だった。土地カンがあり、敏しように性のあるスカウトは齒はめったに洗ってなくとも、園児を捜して連れもどすのは上手であった。父の残してくれたもののうち、巨きすぎる法然寺と、ボーイスカウトは、松平頼明氏が連盟長である関係から、法然寺としては、どおしてもやらねばならぬと、私が帰山する十年前、昭和二十八年に出来たという。しかし、私が隊をついだ頃は、隊員も減り、日曜日の集会日になると、四、五人の制服も満足にない為、首に、緑と黄のハギレを巻いた連中が、誓とか、掟とかを右手を挙げて指三本立てて言うのを遠目に眺めていた。そのうち、私は制服を着せられるようになったが、進駐軍の軍服に似たこれは、眉目秀麗な少年か、足の長い細身には似合うが、太り気味の私には、醜惡そのものであったろう。

しかし、制服とは一旦着ると段々着たくなり、自分は似合うものと思うようになってくる。それは、スカウトへの感情移入の深まりと共に傾斜は激しくなってきたようだ。昭和三十九年のキャンプに、津田浜へ一泊のキャンプに行った時は、日本海の荒野の海へ潜り続けた私には、瀬戸内海の乏しさに、海道、当地のボーイの少年の様に不毛なものなんだと思うようになった。しかし、ええい、どうにでもなれと、自分の背負った学園とスカウトへ、猛烈にフアイトを湧かして取り組みだすと、今迄、自分の半可通の知識やうぬぼれや、視野の狭さから見えなかった、キラッ、キラッとしたものが、スカウトや学園の仕事の中に見えだすし、やるからには、負けぬぞ、根畜生と取り組む。その頃には、深みに嵌まってしまつて、学園とスカウト、それ以外に目の行かない、十年間だった。

深みに嵌つてもがいているうちから、スカウトでは、昭和三十九年には、年間夏一泊だった野営も、三日、五日、一週間と増え、昭和五十年以後には、年間一カ月はキャンプで過すボーイの連中も出て来た。野営の生活の凄さが分ってくるうちに、自然の巨きさに触れ、この環境を学園

の子供達への思いは募り、昭和五十一年開設の精神薄弱者更生施設竜雲少年農場は、徳島県と香川県の県境に近い阿讃山脈の前山に、敷地三〇ヘクタールの山地に、日本芝を植え、乳牛の放牧地とした（園生、職員、百五十名は毎日この牛の出すミルクを飲む）。雑木からは、しいたけの栽培が一万本、休耕田の二ヘクタールへは牛糞の捨て場とした。牛糞で肥えた田圃は、夏には、胡瓜、ピーマン、茄子、南瓜、トマトに西瓜、冬場には、玉葱、大根、キャベツというように、大豊作に見舞われ、全て自前の野菜である。働く園生も、体力が付けば氣力も付き、五年目を迎えた今年は少年農場では、次なる計画を、北海道は標津へ、園生の生活領域を拡張、生きた国際障害者年にするのだと、突出して計画実践に当たっている。尖兵は十六年前、京都から帰った時、私が嫌いぬいたスカウトの今日に残る二人のうちの一人である。私達は、昭和二十八年に出来たスカウト香川第二団を、私の隊長に就任した昭和三十八年以後今日迄とを分けて、三十八年迄を有史前、それ以後の今日迄を有史時代と、ふざけあって呼んでいるが、私の帰る以前からいる二人はまさに、ボーイスカウトの吾隊のご先祖様である。

昭和五十年は、竜雲学園から枝分れした、成人施設の竜雲少年農場の設立、建設も確定し、ボーイスカウトは、私の便りの出来る隊長もぼちぼち育ち、少年隊一隊から、ご先祖様の一人が隊長をするカブ隊、その他にシニヤー隊、ローバ隊と四隊に増え、ちよいちよい息抜き出来るようになった。寺の方は、父である二十七世も、大患のあと、八十三歳では、いささか活動もにぶくなり、私の十余年の、スカウト生活と学園暮らしの目を寺に向けなければならぬ時期に来ていた。学園は法然寺の境内にあるが、これは汚し専門で、堂宇も、昭和三十六年の御遠忌の大改修以来十五年余り手をつけなかった為、創建三百年は経つ建物は一せいにくずれを見せ始めた。

まず、鐘楼門、これは、戦時中、釣鐘を供出して以来、バランスが崩れたのか、山側の半面が腐り、大改修を要していた。そのままトタンの挿しかけで、三十年間、あとは解体してすっきりするか迄来たが、無くなったものを元へ戻し、有るものは大切に維持する。それが出来ないなら住職を止めて、出来る人を更ればよい。と、施工業者を捜し、松平藩十二万石の菩提寺であるからと、松平さんにお願し、約三千万円かけて、五十一年

秋、落慶を法要行った。この時は嬉しかった。その頃から、めったに來ぬ台風が来れば、堂塔の一つや二つは大破してゆく、梅雨、秋の長雨に、本堂、書院、庫裡と、穴があく、次々、改修を要する堂塔は十七を数え、予算は一ヶ所、五千万から八千万、中には億を数えるお堂もちらほらある。それだけでは済まず、諸堂併せて、仏様や、菩薩様、えんま様、十王様、歴代住職像、涅槃仏と、そのご眷族、五十二類の鳥獸など、百二十体余、これをひつくるめて、改修し、仏生山の名のあるとおり、山頂から出土した、お舍利が宝蔵の中にある。お舍利を祀る五重塔を建立し、これら伽藍の総改修の締くりにしよう、色々な方々を引っ張り込み、「万灯」を掲げていただき、それで、改修することにした。

大名寺だから、檀家は、バラバラしかない。

もし檀家の多い寺なら、絶体にこんな計画にOKは出ないだろう。松平さんを三年がかりで口説き落して、頭に座っていただき、鵜飼隆玄先生、高松正八先生（弁護士、元最高検次長検事）、山口恒則先生（四国電力会長）、三野博先生（百十四銀行頭取）、大西潤甫先生（琴平電鉄社長）、に代表理事にお座りいただきスタートした。奉讃会の型

が出来て、頭を空っぽにして走り廻ると、何となく上手く行く気がしてくる。庫裡を一つ終え、涅槃堂を外側だけ一応終え、今秋より常念仏即ち來迎堂へかかる。地元の仏生山のメンバーは、数年前迄、境内の松林を車を通す通さぬで大げんかした人達、陰のスタッフは、在家の生れながら、弟子になったり弟子の真似をする十六年前からのスカウト達、九十歳になる父は車椅子ながら、五年振りに今夏の虫干会に出勤、全てがうまくいっています。私のしていることは、わあわあ言って二年前秋から、境内へ引っ越して來られた竜雲クリニック（精神科）の院長と週三回診療後、約一時間ビールを飲むだけが仕事みたいになっている。院長は、この事業が終る迄、ずっと私を燥状態においておき、煙狂状態でどこ迄も走り続けなさい、と親切に言う。

鵜飼先生には、昭和三十九年夏、知恩院のスカウトの会合で噛みついたし、佐藤治子先生にも噛みついたが、皆さん大きな風姿で、お許し下さり強力なお力を下さる。十八年来苛めて、追い廻したスカウトが、学園発展に寺の復興に力を尽してくれる。皆これ、仏様のお計いと、お任せして、皆様にお縋りしている。有難うございます。



お彼岸を迎えるにあたって

桑山春山

（尾張教区長
名古屋雲心寺住職）

今年は大変暑がったようです。年を重ねるに従って、暑さが非常に身にこたえるようです。

人生の四つのくるしみ、生、老、病、死。愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦を合せて八苦といいますが、若い時は、四苦八苦の非常の苦しみを身にしみて感じなかったようですが、年老いた



この頃では身にしみて感じるようになりました。

生、宅、病、死の四苦が非常な苦しみであることは言うまでもありませんが、愛別離苦の悲しみも、たえがたいものがあります。

私の父も明治生まれの頑固な人のようでしたが、私の母も明治生まれの温良貞淑な女の方でした。夫である私の父の言葉に対しては少しもさからうことは無く、「はい、はい」と素直に従っていた姿は今でも目にみえる様です。

母は昭和二十年六月十二日戦争末期に亡くなりました。

父のそれからの日々は真に気のどくで、七、七日、四十九日の間は、仏間に閉じこまり、明け暮れ母の冥福を念じておりました。父の心境は母への懺悔と、感謝の気持で一ぱいであつたであらうと思います。

また名古屋に越秀運輸という会社がありますが、この前社長秀策氏は立派な方で受勲せられた方ですが、昭和五十二年十二月二十八日に亡くなりました。

翌年の二月二十八日に長男の方と次女の御主人が来寺せられ、「母が絶えまなくブツブツと一人ごとを言い、夜中に二階を歩き廻

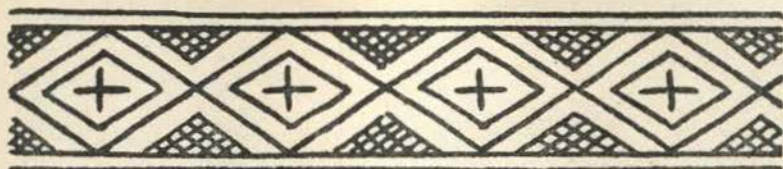


り気が狂ったのではないでしょうが、一度おいで下さってお話をしていただけないか」という事で、お伺いして色々とお話を承けたまわってみると、亡くなる前夜お腹がすいたと言って奥様のお手作りの料理をいただかれ、翌日感謝のうちに亡くなられました。奥様はそのやさしいお言葉が嬉しく、又人の世の哀れさが思われて、遂つぶやいたり、夜中に部屋の中を歩き廻られる様です。亡くなってからも毎朝御主人様好物のお茶をたて、梅干しを供え奥様もまたお茶を飲み、梅干しをいただくのが唯一の喜びであると申されます。

爾来毎月二十八日に御回向に参上いたしますが、熱心に御念仏をお唱えになります。

また、私の近くに田畑さんという方がありますが、北海道の出身で、盛大に家具商を営んでおられます。昭和五十四年十月二十六日に八十九歳でお亡くなりました。御主人様の生存中は毎晩十時頃まで夫婦揃ってテレビをご覧になってた様ですが、亡くなってからは夕食がすむとすぐにお寝みになるようです。御子息が「それやーとても仲の良い夫婦でしたよ」とおっしゃいます。

子や孫によい父であり、よい祖父であったと慕われたいもので



す。このお宅にも月々の御回向に午前中参上しますが、月々二十二日、二十三日頃から、もう二、三日すれば和尚さんに来て御回向をしていただけるか、それが待ち遠しいとおっしゃっております。午前中にお伺いできないと、電話で「お病気ででもありませんか」とお尋ねになり恐縮する程です。

夫となり妻となる尊い縁を思い、睦みあい、悔いのない生涯を送りたいものです。

誰でもしょうが、妻に先だたれるという様な不幸な惨さにはあいたくないものと念じております。男のわがままでも言うべきでしょう。

奥様方に御主人様よりも一日でも長生きしていただきたいものと切に願っております。

み仏さまはお慈悲の深い方です。御念仏を唱えさせていただくことによって幸の日を送りたいものです。

お彼岸を迎えるにあたって、お念仏を喜び、明かるい平穏な日暮らしをしたいものです。

〈随想〉

ほとけとの出会い (十四)

佐^さ竹^{たけ}隆^{りゅう}三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)



時間に関して大乘仏教においては、アビダルマ仏

教の場合のように集中的に論じられてはいないよう
に思われます。時間論は、それだけ独立しうるよう
なテーマとはなっていないような印象を受けます。

大乘仏教では、一般的に日常的な時間観念が執着と
して取り扱われ、それは執着であるが故に超越され
るべきものとされるのであります。したがって、超
越されるべき執着としての範囲内で時間が問題とな
ってくるので、このために大乘仏教では時間論がそ
の前面から退いているような印象を与えるのではな

いでしょうか。

「般若経」の空思想を哲学的に基礎づけたナーガ
ールジュナ、アーリヤデーヴァの時間論にはじめて
接したとき、わたくしは大きな驚きとともに非常に
感動を覚え、そのすばらしさに魅せられてしまった
のであります。

「般若経」正しくは「般若波羅蜜経」(Prajñāpā-
ramitāsūtra)とよばれる一連の經典がありますが、こ
の呼称は「般若の完成についての經典」を意味し、
「すべての存在者、それが如来であれ涅槃であれ、

われわれが存在者としての認しているものは、それ自体、実体的本質をもたず（無自性）、空なるものである」とする思想を説くのであります。

この思想は「三昧（瞑想）の体験に裏打ちされ、無自性空において認識し行動するとき、般若波羅蜜、般若の完成が達成される」とするのであります。般若波羅蜜は、主客分裂に基づく日常的な認識を超えて、何ものをも対象として認識せず、したがって対象と同じく主体の側でも認識する自我として何ものをも立てられないときに、獲得、実現されるのであります。

これは同時に事物、自我に対する一切の執着から離れることを意味し、そこでは、般若波羅蜜が般若波羅蜜として对象的に認識されることも執着となるので、般若波羅蜜もそれ自体として実体的に生存在しない、すなわち空なるものであると観ぜられなくてはならないとされるのであります。

このような言わば絶対的な否定を通じて、逆に存在者に執着せずそれをありのままにいきいきと感じることを勧めるのが、この經典群の主たる目的にな

っているように思われます。

この思想的立場に立てば、時間がどのように取り扱われるかは自ずから明らかであろうと思われるすが、どのような時間論が展開されているのでしょうか。

「八千頌般若」では、「空」ということさえ、それが对象的に把握されていれば執着であるとはつきりと表現されています。時間についても同じで、わたくしたちが過去・未来・現在として考えるのは固定した相として時間を認識していることであって、それは執着にかわりはありません。このような日常的な時間観念は超えられねばならないことは当然であります。

「般若経」は、「愚かな通常の人々（凡夫）は究極的な教えを聞かず、諸法に執着している。彼らはあるもしない一切法について分別する。……真実の道を知りもせず見もしないために、輪廻の場としての欲望世界（欲界）・物質的世界（色界）・非物質的世界（無色界）の三世界に所属するものから離脱できず、究極の真理（bhutakoti）を悟らない。これがために

彼らは「愚か」と呼ばれ、真の法を信じないのである。ところがこれに反してボサツたちはどんな法にも執着しないと述べています。

ボサツたちが実践する究極的な真理の世界では、対象の姿は消えてしまい、一切法は空になり、一切法は空になり、一切法は無の判断を超えて立ち現われるのであります。ボサツたちがそのような境地にいるのに対して、普通人たるわたしたちは執着の世界にいますのであります。

過去・未来・現在の三昧に現象する一切法の真如は時間的であるが如来の真如は本来時間的な生起を離れているためにそのようなものではありませんのであります。それなのに般若波羅蜜の立場では、この二つの真如は同一とされるのであります。それは何故でしょうか。

普遍的な意味あいをもつ如来の真如と一切法の真如に個人が契合するとき、時間がその契合の契経となるとするのが「般若経」の作者たちの結論であります。彼らがこのように語るときは、三昧の体験を基礎にしているということを考えれば、これは、如

来を、観、ず、る、こ、と、に、よ、つ、て、時、間、の、真、の、姿、が、現、わ、れ、時、間、を、観、ず、る、こ、と、に、よ、つ、て、自、ず、か、ら、如、来、の、姿、が、見、え、て、く、る、と、解、さ、れ、る、の、で、あ、り、ま、す。

ナーガールジュナ(Nāgārjuna 竜樹、一五〇—二五〇年ごろ)は、「般若経」の立場に立って、しかも哲学的に基礎づけ、仏教のその後の思想展開に重大な影響を与えた人です。

彼の空思想、中観の思想はその主著「中論」によって知ることができます。すべての存在者、わたくしたちが日常的に認識しているもの一切は、よく考察してみるといろいろの原因や条件に規定づけられており、すなわち縁起して存在しているのであります。それは、それ故に、わたくしたちが考えるような実体性はもたず、それ自体の本性を欠く無自性のものであって、この意味で空であると呼ばれるのであります。

しかし、それらの存在者は実体性、自性をもたないままわたくしたちの認識にとっては一応存在するのであります。換言すれば、「存在論的に実体として存在するのではなく、認識論的には種々の条件に

規定されて、仮に存在するもの、施設有・仮有 (contingent) のものにすぎません。

このように一切が空であり、仮に存在するとすること、そのように観ずることによって、わたくしたちは「一切についての二者択一的な有無等の判断を離れ、その判断に基づく行為を離れて、中の立場に立つ」ことができるのであります。このことを極めて論理的な思考の積み重ねを通じて明らかにしようとするのが「中論」であります。

「中論」第十九章「時間の考察」では、時間の存在性が三方面から否定されているのであります。第一は過去・未来・現在の間にあると考えられる相対関係に関するもの、第二は時間の認識に関するもの、第三は時間存在の根拠づけに関するものであります。

わたくしたちが過去・未来・現在というとき、その三者間に何らかの関係が認められていることは事実であります。未来から現在、現在から過去といった方向も考えられているであろうし、過去と未来の接点として現在があるといった場合でも、過去と言

うから未来があり、未来があるから過去があるといったように、いつも何らかの「関係」が前提になっているのであります。

ということは、過去・未来・現在は相対的にしか成立せず、それだけで存在するものでないことを意味するのであります。ナーガールジュナはそのことを見越した上で、過去・未来・現在の間に相対関係があると考えた場合と相対関係がないと考えた場合とにまず分けて、その考えをもつ矛盾をそれぞれの場合について指摘するという論法をとるのであります。

ナーガールジュナの時間存在論批判の第二は、時間の認識に関するものであります。

彼は、「時間を非固定的としても固定的なものとしても、そこには量的な時間認識が成立せず、また量的な時間認識が矛盾をもつことを指摘することによって、時間の量的認識を否定し、時間の独立存在性を否定している」のであります。

批判の第三は、時間存在の根拠づけに関するものであります。が、「アピダルマ的な時間論を空の立場

から解^い釈^ししな^おした^もの^の」とい^うこ^とが^でき^ると思^われ^ます。時^じ間^{かん}の成^{なり}立^たつ根^ね拠^き自^じ体^{たい}を無^む自^じ性^{せい}・空^{くう}と^して、時^じ間^{かん}の实^{じつ}体^{たい}性^{せい}・存^{そん}在^{ざい}性^{せい}を否^ひ定^{てい}し^てい^るの^であ^りま^す。

ナールガルジュナの時間論は、現実の時間観念を肯定して時間の構造を積極的に明らかにするのではなく、時間の虚構性をあばき出すものとなっています。時間の実体性を徹底的に否定し、それを通じて

時^じ間^{かん}に^対す^る執^{しつ}着^{ちやく}を^断つ^目的^{てき}を^もつ^てい^るの^であ^りま^す。

正しく捉えられた時間、執着を離れた上で捉えられる時間は、何の分別も働かせないでありのままに捉えられた時間であって、その内実は一切の空なることを観する三昧のなかに現われ出るものにほかないのであります。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画販売についてのご案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八―二八七

小砂利の山



長年の懸案であった自作の俳句をまとめてみようと思ひ立ったのは、娘のひろみがアメリカの大学へ帰ると言い出した、今年の四月初めのことであった。

高校三年の九月からアメリカへ留学させ、日本語を忘れさせないために週一回の音信を義務づけた手前、私もそれに応えるべく毎週欠かさず便りを出し、それに毎回二、三の俳句を書き添えた。書くことがないと大半を俳句で埋め、季語の解説などしてお茶を濁した

木きの
下した
隆りゅう
一いち
(随筆家)

ことも何度かあった。そのせいでもあるまいが、四年近く向うにいたにしては正しい日本語を忘れずにいたし、ひょんなことから休学して一年半近く日本にいた間にますます日本語に磨き(?)をかけて帰って行った。

ひょんなことからというのは、一昨年の冬休みに帰って来た時、一月二日の飛行機で発つはずだったのが、航空会社のミスで搭乗券が二重売になっていて、出発が四日程遅れることになってしまった。

「一月二日に発っても新学期の授業にぎりぎりなのに、四日遅れると授業について行けなくなる。なら、むしろ一学期休学した方がいい」

風邪をこじらせて極端に体調をくずしていたし、長年、それも女性として一番成長する時期手許に置いていなかったの、遅まきながら日本女性としての教育をするのに良い機会かも知れないと思って、私は思い切って休学させた。

その後、母校の女子聖学院へお手伝に行った。はじめは六月までと考えていたらしかったが、

「半端だから来年の三月までお手伝するわ。一年浪人したと思えばいいんですものね」

と、アメリカへ休学を願い出て、週に二、三度母校へ手伝に行くかたわら、千駄ヶ谷の津田国際研修センターに通って国際公務員になるべくトレーニングをつんだりしていた。そのひろみが今年の四月に入って、急に復学

したいと言い出した。

「同級生の卒業式にも出たいし、サマーセッションを取って単位の足しにもしたいし……」

そして五月二十三日、うだるような暑さの中、渡米というより、帰国と言った方がびったりするような素振り、アメリカへ飛び立った。

私の句集はひろみに持たせてやろうと、出版の日間に間に合わすべく時には徹夜までしたが、とうとう整理はつかなかった。

私が俳句に親しみ始めたのは中学四年の時であった。学制が混乱していた昭和二十二年のことで、因みに翌年私たちは新制高校の二年に編入された。

同好の士が数人集って、俳句班なるものをでっちあげ、何かやろうということになった。幸い、仲間の一人の父親が『春星』という俳誌を主宰していたので、九月十九日の子規忌に話をしてもらった。青木月斗門下の松本正気という歯医者さんがその人で、俳句の

上では私の恩師ということになる。そんなことから私も自然に『春星』の同人となり、句会の末席を汚すことになるのであるが、大人に伍して投句や選句するのが楽しみで句会には割合よく出席した。

『春星』や句雑誌帖を基に整理を始めてみると、次々と懐しい日々が甦って来る。

昭和二十二年、天皇は休むいとまもない程の日程で全国を巡幸されていた。私が当時住んでいた広島県の三原市にもお出でになり、工場を視察された後、一晩お泊りになった。十二月の中旬であつたと思う。

兎や万歳あとに齒簿進む

齒簿という字を辞書でたしかめたのを昨日のことのように思い出す。齒簿といっても数台の自動車にすぎなかったが、木炭車でなかったことだけは確かである。

お召し列車の車両は独特のインペリアルカラーとよばれる濃い栗色で、それからというもののチョコレート色の包紙を見ても「インペリ

アルカラーだ」と私たちは言って、当時の流行語になった。

伊豆に住むようになって、一度、下田の御用邸へ向われるお召し列車と、伊豆多賀の駅ですれ違ったことがあった。伊東線は単線なので、お召し列車といえども上りの列車が来ないことには身動きがとれないのである。偶然にも私たちの座席が陛下のお席と向い合う位置に停車した。女房と私は思わず立ち上って深々と最敬礼をした。三十数年ぶりに間近にお顔を拝した私は、あの頃よりお若くなられたようにお見受けした。

赤字に悩む国鉄が、いま伊東線の複線化を急いでいる。お召し列車をお待たせしないようにという配慮か、というの私の読みすぎかも知れないが、理由はなんにせよ便利になることには賛成である。

大会旗翻翻と秋の朝風に

以下数句が『第三回福岡国体にて』と前置して並んでいる。昭和二十三年の国体に、徒

手体操の広島県代表として参加した時のものである。

昭和二十五年、三原高等学校卒業。

三月一日が卒業式で、その夜の満員列車で受験のために東上。十四時間立ちこん坊で着いた東京の朝はうす汚れて見えた。

天皇は在さず朝の御所うらら

この時、陛下は四国を巡幸されていた。天皇の全国巡幸は、いまだに続いていたのである。翌三日が東京大学の試験日であった。

入試場痛き頭を振りつつ出づ

寝不足と風邪と数学に失敗した頭の痛さである。苦手の数学だから、ある程度は覚悟していたが、隣に坐った旧制高校の襟章をつけた男が問題を見た途端オイオイ泣き出したのを見て、なぜかむなしくなってしまった。

浪人はこれで決定した。しかし、いささかも悔いはなかった。俳句とスポーツと、その頃飼いだめた仔犬と遊ぶのに夢中で受験勉強らしいことは一切やっていなかったのだから。

行春に手を振って別れたく思ふ

同じ二十五年の作である。浪人生活のつれづれに、夏の最中この句を葉書に認めて、受験雑誌の『螢雪時代』に投稿した。不断投稿などしたこともなかったのに、なんとということであろうか。そして、そのことはすっかり忘れてしまっていた。ところが、それが二十六年の四月号に特選として載っているのにはびっくりしてしまった。掲載された雑誌はいつか無くなってしまう、選者の名前も覚えていないが、選評に、作者は多摩川にかかる橋の上から川下を見て作ったのであろう、スケールの大きい句である、というようなことが書かれているのには二度驚いた。ご丁寧に作った場所まで設定してくだされているのである。しかも川下を見てとまで書かれている。これが鑑賞ということであろうか、とその時私は思った。有難いことで、あるが、私は一言選者に申し上げたかった。

これは一年下の、片思いの、初恋の娘への

訣別の句だったのです、と……。

一つ書いては思ひ出に耽っているから、作業は一向に捗らない。一応歳時記風に新年、春夏秋冬と纏めてみたが、日本の四季の範疇から大きくはずれる、アメリカとインドでの作品は、海外という項目をたてて一纏めにした。

おぼろげな記憶を頼りに、やっと書きあげた時には、娘はとくにいなくなっており、季節はいつか梅雨を迎えていた。

総句数は一万を僅かに超えていた。句歴三十三年というのであろうが、途中一句も作っていない年がかなりあるから、実質的にはそれほど長くはない。その間なにをしていたかという、短歌や散文詩にそれたり、歌謡詩に逃げたりしていたのである。

玉石混淆というのもおこがましいほど、読み返してみれば小砂利の山である。それでも緑陰に牛車も人も憩ひけり

隙間風螢電氣に変わりけり

所在なく点灯待つや隙間風

配給で貰ひ帰りし凍豆腐

春泥や四五台続く供米車

などという句を見ると、昭和二十三、四年頃の生活が偲ばれて、新たな発見をしたような気になるが、少々解説をしなければ若い人には判ってもらえない面もあろうかと思う。

当時の輸送手段といえば牛車が主だった。

供出米を運ぶ車も牛車であった。螢電氣というのは、三十分おきくらいに電圧を下げて電灯を暗くしてしまうのである。電力事情の悪さが生んだ智慧だったが、おかげで粗悪な電球はよく切れた。螢電氣の次に来るのが停電で、一度消えたらいつつくとも知れなかった。凍豆腐が配給物資の一つだったとは……。

思ひ出は尽きないが、紙数の方が尽きてしまった。いたずらに過去をふりかえるのは老いた証拠というが、来年は私も齢五十。備忘録として駄句を作り続け、小砂利の山を積み上げて行きたいと思っている。

おひがんせんべい

ひがん花が咲くと、秋のおひがんです。

空には、白い雲。

マンガの本をよんでいたけんちゃんが、ふと窓から空を見ると、白い雲が、何かに似ているような気がしました。

食いしん坊の、けんちゃんには、ソフトクリームにも見えました、だれかの顔に似ているのです。

「だれだったかな。ああ、そうだ。あの雲はおじいちゃん、おばあちゃんの顔にそっくりだ。」

ぬのむらてつや
布村哲哉

けんちゃんが、幼稚園へかよっているときには、毎日、送り迎えをしてくれたおじいちゃんとおばあちゃんです。

「そうだった。よくおもちゃや、おかしを買ってもらったなあ。」

雲の顔が、にこにこ笑っています。

「けんちゃん、おじいちゃんと、おばあちゃんのお墓まいりに行きますよ。」

おかあさんの声です。



マンガの本を、ほうり出した、けんちゃんは、

「今ペンきょうしているから行けないよ。まだ宿題のこっているんだもの。」

いそいで机の上へ教科書とノートを並べたのですが、やる気にはなりません。

そこで、おじいちゃんの雲に向って、いいました。

「ペンきょうが、すきになるのには、どうすればいいの。」

おじいちゃん雲の声が遠くからして、

「あはは、けんちゃんらしい、しつもんだね。それは、かんたんだよ。」

「えっ、ほんと！ おしえて、おしえて。」

けんちゃんは、一生懸命です。だって、ペンきょうがすきになれば、もう、おかあさんに、おこられないで、すむんですから。

「お墓まいりをすれば、いいんだよ。」

「なんだ、そんなことか。つまらないの。」

けんちゃんが、がっかりして云ったとき、玄関から、おとうさんの声です。

「さあ、けんいち、出かけるしたくは、できたかい。」

そう云われると、なおさら行く気がしなくなってしまうのが、けんちゃんなのです。

こんどは、おばあちゃん雲に向って、ききました。

「おまいりすると、何かいいことあるの。」

「……。」

その時、強い風が吹いたのでしょうか、白い雲は、どこかへ飛んで行ってしまったのです。

「じゃあしかたがない、行ってみようか。」

おとうさんと、おかあさんに、いやいやながらついてきたけんちゃんは、バスに乗ってもお年寄に座席をゆずろうともしません。

お寺では、蟬がジイジイと、うるさく鳴いています。

けんちゃんは、おとうさんとおかあさんがお花とお線香をもらいに行っているすきに、

「えいっ、うるさいぞ。」

と木の上の蟬に向って、小石を投げつけました。蟬は、おしっこをかけて、逃げて行きました。

「にくらしい蟬め。」

しゃくにさわって、小石をけとばすと、つまさを敷石にぶつけて、

「あつ痛てて……。」

水を入れた手桶を、ブランブラン振り廻しながら持ったものですから、水がボチャンボチャンと足をぬらしま

す。

「えい、水め。よくも足をぬらしてくれたな。」

と、ひしゃくの水を、勢いよくお墓へかけますと、その

しぶきが、けんちゃんの顔へビシヤ。

お線香をふりまわしたら、

「あちち……。」

きれいなお花も、横をむいています。

おかあさんが、お花とお線香をきちんと上げて、おと

うさんが、静かに水をかけます。

みんなで手を合せて拝むと、鏡のようにピカピカ光るお墓の石の中に、おじいちゃんと、おばちゃんの顔が見えました。

お墓まいりもすんで、本堂の仏さまへおまいりをしたけんちゃんたちが、おしょうさんにあいさつをしますと、

「きょうは、おまいりをしてくれて有難う。これは、ごほうび。」

おしょうさんが、紙につつんだものをくれました。

「あけて見てもいい?。」

けんちゃんがいうと、おしょうさんが、にこにこしながら、うなずきました。

「なんだ、おせんべいか。一枚二枚……六枚か。」

「これこれ、そんなことを云ってはだめ。早くおれいをいいなさい。」

おかあさんがいうと、おしょうさんが

「あはは、いいよいいよ。でも、それは、どこにでもあるおせんべいとは、ちょっと、ちがうんだよ。おひがんせんべいっていうな。よく見てごらん。」

けんちゃんが、紙の上へ一枚一枚ならべてみますと、

おせんべいのおもてに、おさとうで字が書いてあります。

「けんいちは、小学生なんだから読めるんだろう。」

おとうさんにいわれて、どきどきです。もし読めなかつたら、おしょうさんに笑われて、おとうさんも、おかあさんも顔を赤くするでしょう。

最初のおせんべいの字を、小さな声でいいました。

「人のため。なーんだ、これなら読めるよ。」

ほっとして、二枚目からは大きな声です。

「よく考え。三枚目ががまん。次が、がんばる。五枚目が、おちつき。おしまいが、元気だ。」

「よく読めたね。では、家へ帰ってから、一枚つつ、ゆっくり食べてごらん。おせんべいがお腹へ入ると、お腹の中から声がするよ。その声が、なんでもおしえてくれる。」

おしょうさんにいわれて、けんちゃんは、およろこび。

「わあーい、おひがんせんべい。ありがとう。」

おれいをいうと、おとうさんと、おかあさんと、元氣にお寺の門を出ました。

さて、家へ帰ったけんちゃんは、おせんべいを、まずおぶつだんにおそなえます。それから自分の部屋へ持っていくと、

「さあ、食べてみるかな。お腹の中の声が、なんでもおしえてくれるなんて、ありがたい。宿題なんか、たちまちやってしまうぞ。」

まず最初のおせんべいです。

「ふーん、人のためか。ポリポリ、うまい。」

お腹の中から声がして

“きょうは、人のために何かしてあげたかい”

「うーん、どうだったかな。」

けんちゃんは、少しはずかしくなりました。

「そうだな、このおせんべいも、おとうさんと、おかあさんにわけてあげなくちゃ。さんぶんのいちを食べて、と。次は、よく考え、せんべいか。バリバリ、これもおいしい。」

また声が出て

“きょう自分がしたことが、いいことだったかどうかをよく考えてごらん”

「えーと、蟬に石をぶつけて、それから。」

けんちゃんは、首をすくめて、三枚目の、がまんせんべいをカリカリ。

“おとうさんや、おかあさんのいったことにすぐおこらないこと”、とお腹の声。

「うーむ、むずかしいなあ。」

と顔をしかめます。

四枚目の、がんばるせんべいを、バリバリ。

“マンガをよむのと一緒に、宿題もがんばれ”

と声がします。

「たいへんだけど、やってみよう。がんばるせんべいが、お腹へ入ったんだもの。」

なんだか不思議です。

とても気持がいいのです。

おちつきせんべいを静かに食べると、お腹の中の声がする前に、自分からいいました。

「お墓まいりをしたときに、らんぼうにしたの、ごめんなさい。」

「さすが、けんちゃんだ。えらいえらい」

と、どこかで声がしました。それは、おじいちゃんか、おばあちゃんの声だったようです。

いよいよおしまい、元氣せんべい。

「いただきます。ポリポリ、パリパリおひがんせんべい。なにかがわかるおひがんせんべい。」

元氣いっぱいけんちゃんに、なにがわかったのか、聞くのをわすれました。

こんどはみなさんもおひがんせんべいを食べてみては、いかがでしょう。

きつと、おいしいですよ。

(おわり)

◎ハガキ印刷や案内状等、小物印刷にご利用下さい。ご寺院関係の皆様にも、とくにご紹介いたします。

◇ 阿島印刷有限公司 ◇

〒164 中野区弥生町五―八―十六

TEL (〇三) 三八二―一〇二二

|| 新刊 ||

△ 幼児用▽ 教育えほん

『ほ う ね ん さ ま』

B5判、表紙共一二ページ (カラー刷)

定価三〇〇円 (送料実費)

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一―六

大 道 社



シルクロード・敦煌編

——十七窟の謎——

築^{つき}
地^じ
泰^{たい}
賢^{けん}

敦煌莫高窟が長い眠りからさめ、再び世界の脚光をあびたのは、今世紀にはいつてからである。明治四十二年十一月の朝日新聞は伝えた。敦煌石窟の発見物、千年前の古書絵四箱、学問界を衝動せしむるによる大発見。この知らせは日本の敦煌学、そして西域ブームの発端となった。十九世紀の末から、今世紀のはじめにかけて中央アジアの奥深くに広まる沙漠の秘境をめざして世界の探検隊が次々にくりこんだ。西方からよせて来た探検の波はやがて、かつてシルクロードの東の要所敦煌にも及んだ。イギリスの考古学者スタインは敦煌での大発見の報

を聞いて、一九〇七年莫高窟に到り、僅かな代金と引かえに古書、芸術品一万点を持ち出した。翌一九〇八年フランスのペリオは中国古典を読みこなす能力を発揮し文化財の中から五千点を厳選して帰国した。スタイン、ペリオ等によって持ち出された敦煌の文化財は、現在ロンドンの大英図書館、パリのフランス国立図書館などに収められている。経文など仏教関係の文献をはじめ、さまざまな記録文書、そして絹絵などの芸術品、中国に残され、現在北京の国立図書館に収納されているものを含めると、四万点にのぼると推定されている。敦煌の貴重な

文化財の発見者は当時の住職で王円録であった。一九〇〇年の或日いつものように王円録がアヘンに火をつけるため線香を第十六窟の壁に差込んで置いた所、煙が壁の中にすいこまれるのを見て偶然その奥の窟を発見した。後に十七窟の藏經堂と呼ばれた窟の中から大量の文化財が発見されて、莫高窟に新たな光があてられたわけである。その一窟でどのような事状により封じ込められたのであるか、新しい謎が生れた。敦煌の文化財をスタインやペリオが持ち出した頃、中国は清朝末期の混乱の中にあった。敦煌莫高窟も土砂に埋もれるなど荒れるにまかしていた。後に一九三四年ここを訪れた、スエーデンの学者ヘディンは、こう記している「全般的に言って私には幻滅であった。こんなないがしろに後世の人間によって、崩れにまかされているとは思わなかった」と。

現在のように美しい姿になったのは解放後、敦煌文物研究所が出来てからである。南北に長さ一六〇〇メートルにわたって開かれた莫高窟、その北端に近い所に三層の建物がある。めざす第十七窟はその一番下の階の中にあった。(大量の文化財がかくされ何の為に造られたか興味を持つた―取材班)

十七窟造営には一人の僧がかかわっていた。洪辨がその人である。洪辨は八世紀から九世紀にかけて敦煌を中心に河西地方にその名を知られた高僧であった。時は八世紀の中頃都長安で安録山の乱が起り、玄宗皇帝と楊貴妃は長安を追われ山深い四川におちのびた。それ迄、百年余り敦煌美術に再盛期をもたらした唐王朝の威信と影響力も眼にみえて衰えた。この期に乗じたのが吐蕃即ち西藏であった。中国西南部にあった吐蕃はかねてから北進の機会をねらっていたが、安録山の乱による唐王朝のみだれに乗じて、北にせめ上り八世紀の末に敦煌を占領した。百五十九窟維摩經變相図の中に吐蕃王の姿が画かれている。沢山の従者を従がえ、苞と呼ばれる白いガウンのような衣にゆったりと身をつつみ、供の者の下の立姿には敦煌を支配した王者の風が見られる。敦煌の吐蕃支配時代は七十年続いた。漢の西域進出の拠点となつてから敦煌経営の中心になつていた漢民族は、支配権を吐蕃から取戻す機会をねらった。九世紀中頃吐蕃の都で内乱が起きた。その機に乗じて敦煌の支配権を取り戻したのが、豪族張議潮であった。儀仗隊と軍楽とを従えたこの出行の図に張議潮の得意の様が偲ばれる。時

に都長安では安録山の乱も終り、唐王朝も一応安定をみる。張議潮は辺境豪族の伝統にのっとり都長安へ戦勝報告をしたと考えた。敦煌から都長安迄、凡そ百五十キロ余り、そこは沙漠あり、ゴビあり、そして吐蕃の残党あり。戦勝報告はおいそれと誰に頼んでもよいと言う仕事ではない。張議潮は洪辨に相談をもちかけた。洪辨は思案の末、自分の弟子を使として送ることを受け入れた。

洪辨の弟子は長い旅の末、唐の大中四年(八四七)都長安に到着した。使者は翌大中五年、長安からの吉報をもたらした。張議潮は亀茲郡節度唐使に、洪辨は、河西都僧統つまり河西地方の仏教長官に任ぜられた。張議潮は大いに喜んで洪辨の功績に報い、洪辨の像を造った。

今世紀のはじめ十七窟が発見された時、窟内の壁画は中央に大きな空白があつて未完成のものと言う説も生まれた。然し最近敦煌文物研究所の手によつて十七窟に洪辨像が安置された。すると洪辨像は壁画の空白部分にすっぽりとはいつて壁画は像とあわせて一つの完結した世界を表わしている事が解った。壁画に向つて左側、樹下に立つ侍女風の女性の目は洪辨の像に注がれている。そ

して彼女が手にした大きな如意と服、木に掛けられた水筒とカバンは共に洪辨の身のまわりのものだと考えられている。向つて右側には比丘尼が立ち、手にした扇で恐らく洪辨をあおいでいるものだと思う。十七窟は高僧洪辨の像を安置するための御影堂として九世紀中頃迄に造られたものである。十七窟にまつわる謎の一つは解けた。何時どのような事状でここに大量の書画が封じ止められたのであろうか。「絶域遙関の道、胡沙と細塵」と、唐詩に度々登場する敦煌郊外、この烽火台にはしばしばのろしがあがり戦いがくり返され、シルクロードの要所敦煌では幾度か政權の交替が行われた。張議潮が吐蕃から支配權を取り戻し亀茲郡節度使となり十七窟を造営したほぼ五十年後西歴九〇七年に唐王朝は滅亡する。すると蒙古高原からウイグル族が此地に進出し、敦煌の支配權は張一族から、ウイグル族と友好であつた豪族曹議全一族に移る。この頃中国の西北辺境地帯で力を貯えていたのがタングート族であつた。十一世紀にはいり宋王朝の力が弱まると、タングート族は西に向つて、本格的な進出を始め次々と河西回廊のオアシスをせめ落し、その波は平穩の敦煌にも及んだ。敦煌莫高窟四百九窟の

西夏王の像。敦煌は一〇三六年タングート族の手に落ちた。そして一〇三八年タングート族は李元昊を王にいただいて、西夏を建国し現在の甘肅省などの中国一帯を支配した。タングート族は西藏系遊牧民である。西夏の敦煌支配の統治を示す、この四〇九窟、西夏王供養者像は百五十九窟西蔵王に似て数多くの従者がさかしける華蓋の下に袍を着て堂々と立っている。西夏の北の拠点カラホト町、タングート族の西夏が進攻すると言う知らせを聞いた時、敦煌の仏教徒は大いに慌てた。そして西夏の進攻にそなえ戦禍をさける為に大量の經典をかくす必要があった。その証拠に經典は乱雑に積まれてあった。これがベリオの考えた十七窟封鎖についての説であった。カラホトで発見された西夏文字、西夏文字は漢字をまねて西夏が造りだした独特の文字であるが、これも十七窟の謎にかかっている。十七窟から持ち出した五千点におよぶ文書の中には、西夏文字で書かれたものは一点もない。したがって十七窟が封鎖されたのは西夏の進攻以前であったとするのがベリオの説である。これに対して敦煌文物研究所は異なった考え方を示した。西夏文字は西夏成立以後に出来たものであり、西の端にあたる敦

煌にその新しい文字が普及するには時間がかかるから西夏文字の文書がないと言うだけで、封鎖されたのが西夏進攻以前と決めるわけにはゆかない。第一西夏自身も仏教を崇拜し西夏文字による仏教文献も多いと言うのである。

話は再び敦煌莫高窟にもどる。緑色を基調とする壁画の特徴、西夏時代の壁画、莫高窟には西夏時代のもものとされる窟が二十五を数える。然し奇妙なことに西夏は新しい窟を掘った事がほとんどない。自からの手で窟を作らずに、それ迄に堂々と作られた窟を利用し、前の壁画をぬりつぶし、その上に自分等の壁画をえがいた。この二百六十三窟もそうである。ほとんど緑一色の漢語。壁画の下から別の壁画があらわれた。二百六十三窟では西夏より五、六百年前、六世紀中頃の説法図が現れた。それは緑を主体とした単調な西夏の壁画にくらべ、さまざまな色を駆使した鮮かなものであった。豪華な冠と、うすべに色のぼかしの技法でふちどられた菩薩。西夏はたしかに仏教を崇拜していたに違いないが、美しい仏教文化遺産をぬりつぶすと言う点で、きわめて独特なあり方を示している。

再び十七窟にもどる。古い壁画の上に自身筆の壁画を
書き直す西夏。そこに十七窟の謎がひそんでいるとの見
方も出された。まず十七窟が十六窟に付属する次堂であ
るという位置関係からも両者とも同時に、つまり唐時代
に作られた。ところが十七窟入口を取まく壁画は西夏時
代のものである。だとすれば西夏時代となつてから唐の
時代の壁画をぬりつぶし自身筆の壁画を画くときに不要
と考えた經典と同時に十七窟の入口を封じ込んだのでは
ないかと言ふのである。こうした考え方をしたから敦煌
文物研究所は十七窟の謎については論争後研究の必要あ
りと言ふ。こうして墓高窟には今なお謎がある。十七窟
経藏經堂の可能をみつめその謎を本當に知っている者は
十七窟壁画の主かも知れない。そしてこの樹下美人はま
た敦煌墓高窟が東西交流の場であることを示す証人でも
ある。樹下美人は豊かな実りを約束する女神として西方
で生れた。実りの記し、ブドウの樹の下に立つペルシャ
のアナヒータ。更に移つて印度中部ワールフッドの木の下
に立つ導師像、薬師も豊饒の女神である。同じ印度は
額のバンケーの丸い塔婆の前に刻まれた薬師像。美人が
いただく木は土地によつて異なる。此処ではマンゴーが

みのりの象徴である。中央アジアのシルクロードの要所
トルファンの樹下美人は沙漠の中の生命の記し、タマリ
スクの下に立つ。豊かなほほにベニをつけた姿は唐代美
人の典型となつてゐる。

西郊外にある太子の墓の壁画、ゆつたりとした衣装
をまとい、ちよつと気どつた姿は長安の美人もかくあり
やと思わせる。実にシルクロードの終点、正倉院にある
屏風の美女、唐風の衣裳をまといつた姿ではあるが大仏開
眼の年、日本で画かれてゐる。ペルシャから正倉院まで
の長い樹下美人の旅のほぼ中間点にあたる敦煌、ここ
は、シルクロード壮大な東西文化交流のロマンにみちて
ゐる。(取材班の敦煌に対する感想は省略した)

地名、人命をたしかめるために井上靖氏の「敦煌」を
再読する事が出来た。すでに昭和四十八年五月九日、三
康文化研究所に東洋大学金岡秀光先生の「敦煌の仏教文
学」を聞き、先生よりすすめられて購読したものである
が、小説の主人公趙行徳により、十七窟が封鎖された事
は印象深いことである。

浄土句集

一田牛畝選

藤で作った焼酎を振舞っているのである。寺檀一致の美しい風景である。

老骨は老骨同志春惜む
東京 新井 新生

東京 栗原とも子
つばくろや七里が浜の無人駅

評 潮風吹き抜ける七里が浜の駅は無人駅であるが燕がその軒に巢を作っているらしい。静かな駅に乗降客が燕を楽しむ。

山形 松田 光誉
駐在の留守の机に昼の蠅

評 駐在所には誰も居ないらしい。その机の上に蠅がたかっている。何の事件も起ってない平和な村の駐在所らしい。

福岡 荒牧 還恩
物好よどんたく隊につき歩く

評 どんたくは筑前三大行事の一つで五月

初めに挙行される。思い思いの山車、仮装などして三味線、鼓、鉦、杓子をたたいて道を囃しながら歩くのである。物好ともなれば其のどんたく隊につき歩く人も大勢で二日間夜遅く迄賑うのである。

東京 田中 秀代
草の名を問ひつ問はれつ青葉径

評 草の名は知らぬ人が多いのである。草の名を問ひつ問はれつしながら青葉の径を辿っているのは楽しいらしい。

福岡 高良 慈風
島の寺甘藷焼酎をお茶代り

評 島の寺とは天草の島らしい。酒に強いのが島人である。お茶の代りに島では甘

新緑や小さき合掌仏の子
東京 吉田ゆきゑ

評 幼時より合掌の習慣が大切で、新緑の如き若い芽の子供の時に掌を合せさせていると、仏の子となり立派に成人に。

福岡 上滝津弥音
開花待つ月下美人に燈を消して

東京 真野 竜
早苗田に群れ飛ぶ鶯の影落し

東京 吉原登起子
飛魚や紺碧の波飛越えて

東京 猪瀬 幸子
ミニ水車廻りて神の清水汲む

福岡 服部 光代
久に逢ふ友に日焼を笑われて

東京 栗原やゑ子
神守る阿吽の獅子に若葉風

東京 小笠原香祥
竹落葉金比羅祀る礎巖し

福岡 深井 鉅士
扉を開く線香くさき棚経僧

東京 真野よし子
古家のきしむ階廊夏蚕鳴く

東京 末常てる子
クラス会お喋り尽きず風薫る

福岡 福田 流水
水打てば石が呟く暑さかな

京都 安藤 寛
お浄土も今往けば万緑莊厳よ

東京 栗原とも子
赤坂の坂の横道薔薇紅し

福岡 林 澄山
柜打つやよと崩るゝ白牡丹

山形 松田 允子
寺猫の乾きし餌に昼の蠅

三重 山田 うた
峯仰ぐ墨絵ぼかしの梅雨の空

福岡 行正 明弘
喉鳴らし豪快に飲むビールかな

山口 上野 明達
梅雨あけや百万遍の鉦の音

三重 森 静枝
苗代をまたぎて城を望みけり

福岡 前田 秀峰
芽柳の下に男女のむつまじく

群馬 島津 か寿
病葉やさみしき時もお念仏

東京 細田 初枝
亡き人の香を拵げたり土用干

福岡 国友 星畝
白衣縫ふ修行の僧に梅雨の妻

福岡 高良 幸代
太宰府の朱の反い橋楠若葉

山梨 青山富貴江
春雨や茶筌ゆの字の一人席

一田 牛畝
天平の鐘撞き修す子規忌かな

表紙のことば

「郷愁」

大西耕三

還暦を過ぎて未だわずかであるが、都会の雑踏の中に埋れた生活を送っていると、ふと幼い頃の郷愁にかられることがある。

現実には故里という名のつくものを持たない様な私であるが、こんな故里があったらと、常に心の片隅に描いていた農村の小景を版画にまとめてみました。

暑い夏も過ぎ、はや涼風の吹き始める頃、藁葺屋根の農家の彼方に、夕映に映える緑の丘、その足もとに点在する鄙びた農家数軒、遙かに霞む青い山波、もち竿を手にとんぼ取りに興じたり、小川で小魚達と戯れていた幼い童達も日が西に沈んでいくのを気にしながらそろそろ家路につく頃であろう。場所によ

つてはまだひぐらしの声も聞えているかも知れない。

漸く夜が白々と明ける頃、未だ家人が寝静まっている我家で、『浄土』の表紙を受持つ様になって始めての版をつくりながら、板を刻む音がいつしかひぐらしの声に聞えて来る。小川のせせらぎも心なしか聞えて来る様だ。

鐙の広い麦藁帽子をかぶり、もち竿を手にして、「赤トンボ」や「銀」や「鬼やんま」を追いかけ廻し、又裸足のまま泥んこになって遊び廻ったことが、実際に経験したことや、そうでないことまでも混然となって脳裡をかすめる。

舗装した道路と、石の建物ばかりに囲まれて、朝から晩まで型にはめられ、大人達の枠の中で、おしつけられた様な生活を強いられている今の都会の子供達を見ると、如何にも不幸に感じる。どんなに物質的には昔の子供達に比べて恵まれているとはいえ、自然との対話の少ない生活環境は矢張り子供達にとっては不幸です。

大人達の知恵で、もっと自然の中に放り出して、のびのびとした生活を送らせることが出来ないものかと、還暦を過ぎてからは、特にその感を強くする。

◎今月より、土屋正男先生に代って大西耕三先生の表紙版画絵が登場しました。大西先生は日本版画院会員、七彩会会員等幅広い活動をされています。滋味に富み、しかも牧歌的な暖かい作風です。どうぞ、毎月の表紙版画を今後ともお楽しみに。

『法然上人文状』覚書

—阿弥陀護摩一七箇日支度事—

石^{いし} 畠^{はたけ} 俊^{しゅん} 徳^{とく}

(大津市浄光寺住職)

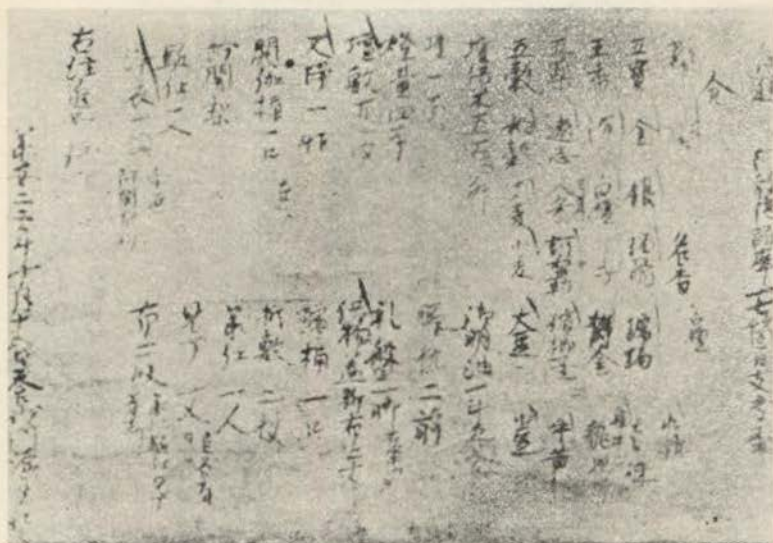
一、文状の発見と判読

お話は少しく旧聞になりますが、終戦後、不自由ながらも稍落着きを見せ始めた昭和二十三年の初秋の頃、京都寺町四条から五条あたりの古書店街で、美術倶楽部の売立の所謂『目録』が店の片隅に積み上げられている中から、表紙の文字の『もくろく』『雲九路久』『茂久呂玖』『毛久呂玖』『毛久呂具』等と書き替えられているのを楽しみながら、さて一応の目標を高僧方の墨蹟の写真版の成るべく多く載っているものと定めて選別して居りました折の事、不図も、この表題の『法然上人文

状—阿弥陀護摩一七箇日支度事—』という写真の一葉を見つけたのでした。

浄土宗祖法然上人の真筆は、各宗の祖師方に比べて極めて少なく現存の確証あるものは、廬山寺本の『選択集』の内題等の廿一文字と、二尊院の『七箇条起請文』の年月日の下の署名と花押のみとされていた頃ですから、写真にせよ新発見は感激でした。

ともかく買い求めて帰山。先づ判読を試みました。五宝、五香等は仏教辞典で下調べして判読しましたが、調度品の名目には見当もつかず困りました。



二、文状原本の写真と解説文

注進 阿弥陀護摩一七箇日支度事

合

類 口 名香 白檀

五宝 金 銀 瑠璃 琥珀 水精 赤珠

五香 沉 白檀 丁香 鬱金 竜腦

五藥 遠志 甘草 訶梨勒 檳榔子 牛黄

五穀 稻穀 大麦 小麦 大豆 小豆

壇供米五石四斗 御明油一斗五合

壇 一面 脇机 二前

燈台 四本 礼盤 一脚 有半疊

壇敷布一端 供物蓋 新布 二丈

大幔 一帳 燭桶 一口

闍伽桶一口 在杓 折敷 二枚

阿闍梨 承仕 一人

驅仕 一人 見丁 一人

淨衣 一領 赤色 布 二段 承仕、驅仕、見丁

右注進如件 阿闍梨料

承安二十二年十月十五日天台沙門源空記之

三、阿弥陀護摩に就いて

『榮華物語』（藤原道長の榮華生活を中心とす）には、「ある所を見れば、曼荼羅を懸け奉りて、阿弥陀の尊勝の護摩など行ふ」と伝え、上流階級にとっては、重要な行法の一つであったことが知られる。

因に四十八壇の阿弥陀護摩とは、密教で阿弥陀如来を本尊として、護摩を焚き、息災や延命などを祈禱する行法で、四十八の護摩壇を設けるをいう、と。

この法然上人文状は、承安二年三月に福原にて、清盛入道が公顯法印（後の天台座主）を導師として行った時の支度書を、邦網を経由して入手、後日の参考のために、写し取って置かれたものか、と。

表題の『法然上人文状』に就いては、昭和五十年七月隆文館発行、開八記念『法然上人研究』（仏大其会編）に、三田全信教授執筆「立教開宗と持戒問題」の中「三、称名滅罪」の所で紹介下さったし、又昭和五十三年五月二十日の叡山文化研究会の席上、天台宗宗学研究所の西村岡紹師によって「阿弥陀護摩と天台沙門源空」と題して紹介下さっている。

四、赤星家について

当初、赤星家については、全く知る処が無く、何か手がかりはないものかと、常に心にかけて居りました処、書架の一隅に、表紙も破れた『宗教界』という月刊誌の第二巻第四号（明治三十九年四月号）を見出し、その中に小杉樞一郎博士が「本邦の書道に於ての弘法大師」という一文を寄稿、その文中に、

「金剛般若経開題というものの草稿、多く草体に書かれたる一巻あり。今は断片となりて、有栖川王府に一片数枚あり、東京麻生鳥居坂町赤星氏に一片数枚あり、余もその残簡一枚を珍藏す、云云」と。

これによって、初めて赤星家の名を知り得ました時は、文字通り雀躍して独り喜んで居りました。

其の後、光芸出版の『骨董価値考』によれば、

「赤星弥之助氏は鹿兒島の出身で西郷従道、横山資紀など海軍の大物と特別関係が深い政商の一人であった。軍艦の大砲据え付け法を工夫して特許をとり、これを日本本の軍艦の発注先である、英国の造船会社社に売込み、莫大なり、ペーソトを受けた。軍艦成金であった。豊富な資力

にものをいわせ、天下の名器を悉く吞み込み、道具界の鱈魚と言われたほどで、晩年は名物茶入を二十八も所有した事を誇っていた。当時日本屈指の大蒐集家。明治三十七年歿。五十三」と。

次に赤星家の入札は、蔵品の優れていたことと同時に、一般の入札と異なる特別な理由が話題を呼んだ。入札に先立って遺族代表赤星徹馬氏発表の趣意書、

「自分が今回所蔵の道具類を売却すべく決心したのは他でもない。亡父弥之助は在世中、道具の取扱を厳重にし、老母の外には殆んど何人にも手を触れしめず、老母も度々叱責せられて非常に苦心せられたが、父の歿後も殆んど自身一手にて取扱い、亡夫の生前から道具係であった八十歳許の老僕一人を相手として多数の道具を虫干するなど容易ならぬ骨折であるから、拙者はこれを見る



(法然上人より勢親房などを経て称念上人へ相伝の名号)

に忍びず、云云。今一つ、道具は愛好家の保護が最適、故に道具に何らの趣味なき者の手より愛好者の手にもどす。自分は他日道具好きとなつたらばその時改めて買入るべく、今日の状態では長く母の手を煩わすは子として甚だ忍びざる処であるから、今回断然これを売却することに決心した」と。

赤星弥之助の嗣子徹馬氏は当時三十歳台で、朝鮮で農場経営をし、朝鮮に在住していた。従来の入札は没落した家が経済的理由で行い、湿っぽい印象が強かった。その点で赤星家の入札は、じめじめしたものを払拭した。カラッとした印象を世間に与えた。

其の後、『アサヒグラフ別刷』、一九七八年秋、美術特集『安田靉彦』の作品中に、昭和九年作の『吉水の庵』と題する法然上人像と共に、昭和十八年作『この赤星家の母堂像』が掲載されているではありませんか。

婦人が、曾ての日、『法然上人文状』の年毎の虫干しに自ら心して手がけられたであらう。不思議な縁です。

唯、残念な事に、この『法然上人文状』は、目録の中の一頁の写真として、私の手許にあるのみですが、此等を手掛りに原本の発見を急じつつ、掘筆。



念佛ひじり三国志

(六)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

住蓮は無人の観音堂にひとり坐りこんで、暮れなずむ
眼下の「山水の景」に視線をさらしていた。と言っても
その風色をのどかに鑑照できる気分ではない。眸の奥
で、たえないいら立ちと不審の猜疑が揺れている。

なぜ誰も登ってはこないのでしょうか。

この観音堂からは八幡社の樹林を越えて淀川が遠望で
きた。淀川はこのあたりでめっきり水量が減り、砂石の
河床がむき出しになっていた。水無瀬川、と呼ばれるの
もそのためであらう。

天王山の辰巳の突角、赤くむけた岩鼻に建つ観音堂

は、古くからの修験道の「行場」（ぎょうば）だった。だ
が近年は修験者の訪れも絶え、山麓に棲む里人の手で観
世音菩薩が祀られた。その観音信仰がいつか専修念仏へ
と発展し、毎月欠かさずに六の日には別時念仏会がもよ
おされるようになった。

結社のリーダーは平氏の武家出身、空阿弥陀仏。住蓮
もこれまでに何度か山頂の念仏会へ臨席したものが、
今宵は無性に空阿弥陀仏と再会したかった。

ところがその空阿弥陀仏はおろか、山麓の里人ひとり
現れようしない。

土地がらである。とりわけ農事が閑な二月だった。里
の念仏衆たちは昼ひなから夜陰までをこのお堂ですご

＜水無瀬離宮の庭園＞



す。女どもが作る獣肉と野菜を味噌で煮こんだごった汁は、めっぽううまかった。

里人はこの楽しい集いを忘れてしまったのか。それとも何か変事が発生したのだろうか。

ぶ気味なまでの静寂――

突然、住蓮は眼前の孤空に小さな黒点を見た。黒点は恐ろしい速さで、住蓮の顔面めがけて迫ってきた。

寸余のところまで身をかわした。黒い物体は背後の羽目板へびしりと音を立ててあたった。それほど害意がふくまれていない小石だった。誰かが堂内に坐る住蓮をねらって投げこんだのである。

誰か……住蓮は座を乱すことはなく、しかし身構えたけはととのえた。

「住蓮どのだったか」

ぬーっと髭づらが外縁から覗きこんできた。

「空阿弥陀……乱暴な挨拶よ、のう」

蓬髪に、着衣も山男のものをまとっていた。変り果てた姿だったが、親愛のこもる笑顔だけは見忘れない。

「いや、なかに誰がいるか、はつきりせなんだによって」

「これを見たらわかるうが」

住蓮は黒衣の袖を示した。

「その坊主が、近ごろ陰呑（けんのん）なのじゃ。たしかめさせてもらった」

「何か、あったのか」

「じつはわしもこの三カ月ばかり此方には無沙汰であつた」

「吉水にもさっぱり姿を見せなかったな」

「うむ。思うところあつてな。今朝久方ぶりで里を訪れてみると……」

里で発生した変事を報告した。

十日前の同じ六の日だった。里の念仏衆がいつものように観音堂で別時会を開始したところへ見慣れぬ僧が二人はいりこんできた。てっきり吉水から派遣された念仏ひじりだと思っていたら、僧たちは威丈高に念仏の停止を命じたという。布令が発せられて今後はいっさい南無阿弥陀仏と口にしてはならぬのだそうである。

ご布令か何か知らんが、わしらの念仏はわしら自身が信じてとなえていること。他からとやかく命ぜられるいわれはない、と里の長老が抗弁した。

首領はお前なのか、と僧たちは左右から長老を引き立

てようとする。念仏衆が長老の身を守ろうとしたとき、かねて観音堂の周囲で待機していた警吏が数人ばらばらと駆けこんできた。

「五郎丸の爺いほか三人が、からめ捕られ、しょつ引かれていった」

「どこへ？」

「さあ、このあたりの判官屋敷かな。それともじかに御所——」

「御所か」

水無瀬の離宮が、すぐ川向うの丘にあった。

「里の衆は、すっかり恐れをなしてな。今朝からわしがいくら誘っても誰一人、登ってこようとはせぬ」

「うむ……」

「せんかたない。わし一人だけでも御無沙汰の詫びに今宵は参籠しようと思つておつた。ところが堂内に誰やら僧形の影があるではないか」

「ツブテを投げこんで、正体を確認したというわけか……それにしてもこんな鄙で、いきなり念仏禁制を実施するとは、どういふことかな」

「京の様子はどうか」

空阿弥陀仏は熱いまなざしを寄せてきた。

「たしかに動きはじめておる。すでに吉水にいる若者が二人、検非遣使の庁へ連れ去られた。しかし、市中には未だ禁礼の高札も出ておらぬし、別時念仏に横槍がはいったという話は未だ聞かぬ」

「やっぱり、あちらの狩人趣味かな」

空阿弥陀仏は暗さを増してきた水無瀬川の上空へ視線をながした。すでにその所在は把握できないが、対岸の松林に豪荘な建物が棟を並べる。水無瀬離宮である。

後鳥羽院は限りなく、この離宮を限りなく愛したようである。閑さえあれば、いや無理にでも閑をこしらえて行幸する。

後年、永久ノ戦いにやぶれた失意を後鳥羽院は歌壇に託した。

たちこむるせきとならでみなせ川

霧なほはれぬ行末の空

さらは隠岐島へ流された望郷歌にも、

水無瀬山わがふる里はあれぬらむ

まがきは野らと人も通はで

軒はあれて誰か水無瀬の宿の月

すみこしままの色やさびしき

と水無瀬を詠みこんでいる。

では、水無瀬の風物のどこが後鳥羽院をそこまで魅了しつづいたのであろうか。

水無瀬を背景とし、あるいはその風物に託した後鳥羽院の歌は多い。だが、どれ一つを取り上げてもわれわれは水無瀬を「山水ノ景」として嘆賞する後鳥羽院とは出会わない。

建仁二年（一一〇二）の六月三日、水無瀬釣殿（離宮）

六首歌合をもよおした事実を「新古今和歌集」は明記している。後鳥羽院は次のような恋歌をうたいあげる。

おもひつつへにける年のかひやなき

ただあらましの夕暮の空

長年にわたって思い続けた甲斐もない恋、今日も夕暮

の空を見つめて悲しんでいる、というぐらゐの意味である。注目したいのはこの歌の前書きである。

——水無瀬ニテ。男ドモ久シキ恋トノフ事ヲヨミ
侍リシニ

おそらくテーマの提出者は後鳥羽院自身だったのであろう。「男の恋を歌ってみようではないか」程度の提唱だ。

いみじくも後鳥羽院はこのさりげない作歌に本音を洩らしてはいないであろうか。

男である。宮廷育ちには珍らしい体質である男つばさ。この男性美に憧れとおしたのが後鳥羽院の生涯だった、と総括できないであろうか。

そして、その男つばさを心ゆくまで満喫できる天地が水無瀬の河床であり、四囲の山々であった。この天地を眺め、山水の気を一杯に吸いこみ、歩きまわることで後鳥羽院は男の血を満たし得たはずである。

二

後鳥羽院が壇ノ浦で没した安德帝の皇跡を継承された帝であったことは言うまでもない。一天万葉の印綬は「三種の神器」であった。しかし神器は安德帝ともども西海へ持ち去られたまま、海底に沈んでしまった。ただし神璽と神鏡は波間に漂うところを掬いあげられて京へ持ち帰ることができた。だが剣は沈んだままだった。

剣のない帝、これが後鳥羽院の人間形成に微妙な因子となったものか。勇武を好み、とりわけ刀剣収集に熱情をかたむけた。水無瀬離宮へしばしばやってきては、山野を歩きまわるのだった。

さびしさはみ山の秋の朝ぐもり

露にしをるる稔の下露

山の蟬鳴きて秋こそふけにけれ

木々の梢の色まさりゆく

見たせば山もと霞む水無瀬川

ゆふべは秋と何おもひけむ

距離をおいて鑑照する歌境ではない。ずかずかと踏みこんでいて、自然の美を掴み出そうとする。ことに三

首目の「ゆふべは秋と何おもひけむ」は詞書に「オノコドモ、詩ヲ作りテ歌ニ合セ侍リシニ水郷ノ春望トイフコトヲ」とあるように女流文学の「春は曙、夕は秋」の抒情をむしろとする。男性の息づかいが身近に感ぜられる。

後鳥羽院のこの強烈な男性志向を忘れて、承久ノ變の斷起や隱岐での長い流竈は理解し得ぬであらう。

この志向を、いま空阿弥陀仏は「あちら」と水無瀬離宮を見やって「狩人趣味」だと言いつつ切った。おそらくいつかの六の日、山歩きをしていた後鳥羽院は観音堂の近くを通りかかったにちがいない。

堂内から洩れてくる里人たちの唱名念仏。

それだけだったら黙って通りすぎかもしれない。

哀調切々たる六時礼讃の合唱――

男の息吹きでのおおいつくしたこの水無瀬の山を、女々しい情音で汚がされた、と後鳥羽院は憤怒で胸を掻きむしられたのではなからうか。

「観音堂に集る百姓どもを召し捕ってしまえ」

これは後鳥羽院の尚武の氣性に抵触したばかりでなく、せん細な美意識をも踏みにじったはずである。

三年前の元久元年（一二〇四）十月。後鳥羽院は「水無瀬ニ侍リシコロ……無常ノ歌アマタヨミテ」と添え書きして、その一首を慈円僧正へ贈っている。

思ひいづるをりたく柴の夕けぶり

むせぶもうれし忘れがたみに

愛人の更衣尾張局が朝仁親王を生んだ直後に他界したのは、つい先年だった。水無瀬へきて夕べの焚き火――折たく柴を焼くたびに立ちのぼる煙り。それにむせびながら尾張局をしのんだという。

折たく柴に亡き愛人をしのぶのは、遺体を火葬に付した思ひ出につながるからであらう。それにしても「むせぶも嬉し」は、ずいぶんドライな風懷ではないか。

ちなみに慈円僧正はこれへの返歌で、

思ひいづる折りたく柴と聞くからに

たぐひしられぬ夕けぶりがな

と、むせんで嬉しくなる夕煙りの実体に芸術的な裝飾

をほどこしている。後の評者が「哀傷に、うれしとよみたる名譽」——「耳底記」、と讃嘆する伏線を構築した。もちろん、これは後鳥羽院の作為ではなく、生(き)のまの歌境であらう。

こうした歌ごろをとおして覗く後鳥羽院の体質が、建永二年の法然流罪をともなった念仏禁圧から、承久三年の鎌倉倒幕へ至る不可解な政治行動の秘密を解く重大なカギとなる。

念仏禁圧も承久ノ変も、発動には側近寵臣たちの策謀がバネとなったであらう。だがこのバネを跳躍させた起爆力は後鳥羽院の意志以外の何ものでもない。すでに坂東武士の団結は整い、大軍勢が上洛しようとする直前でさえ一点の迷いもなく、むかえうつ後鳥羽院の気組み。

「男の血」だ。

ただし、かんじんの戦闘が洛中に迫るや門を閉ざして動こうとしなかった後鳥羽院。そこでは宮廷政治の、芸術家の弱々しい薄す皮が「男の血」の噴出をセキ止めたのかもしれない。

いや、後鳥羽院はこの敗軍必至の渦のなかで、処刑場に属するおのが姿や遠い蕃地への流刑を「新しい体験」

の到来と夢見たであらうか。これもまた男のロマンだったと言える。

陋巷をさまよい歩く一介の念仏ひじり空阿弥陀仏は、この雲上の権力者を「狩人」と呼んだ。獣や鳥を追って飽きない「男の血」を、空阿弥陀仏はいたい何処で嗅ぎ出してきたのだろうか。

もちろん今の住蓮には、そこまで「狩人」なる言葉を追究してみる意慾も関心もなかった。ただ余りにも変り果てた空阿弥陀仏の風体に興味を抱いた。山麓の念仏衆へ加えられた断崖の情報を、くまなく聞きだしたあと、「それはそれとして空阿。近ごろ吉水へもさっぱり姿を現さなくなったが、どこで何をしていたのか」

その髭づらや山男まがいの着衣をあらためて見やつた。

「どこで何をしていたか、はないだろう。怠りなく念仏しておった」

「いや、わかっておる。おぬしのことだ。信心に狂いがきたとは思わぬ。だが、わざわざ俗にかえって本心は？」

「これは住蓮どのの言葉とも思えぬ。お上人さま(法然)

によれば、念仏するところに僧も俗もない。いや、なまじ僧衣をまとうよりも俗塵にまみれる方が、より多くより深く念仏に励めるはず」

「それはそうだが……」

肯定しながらも住蓮はいぶかる。つい先ごろまで東山吉水に現れる空阿弥陀仏は、まことに恰好のいい黒衣で身をかれめていたものだ。つねに新しい着衣をえらび、着こなしかたも板につき善男善女の視線を集めた。

説法は魅力充分で聞く者の魂に喰い入ってくる。だから東山へ集る僧俗で、とりわけ若年層の人たちは、空阿弥陀仏こそは法然絶対の後継者となろう、と信じこんでいた。

それほどのエリートひじりが、俄かに俗装、それも山男に変貌してしまったのである。

「住蓮どの。わしは若いころから戦場を駆けめぐってきた男だ」

空阿弥陀仏は口調をあらためた。

「うむ。聞いておる」

「戦場とは殺すか殺されるかだ。ここで頼りになるものは唯一つ。直感じゃ。人影なき野をゆく。どこに敵がひ

そんでおるか皆目見当もつかぬ。わしらはこのとき、全身を耳にし、鼻にして、わずかな物音や匂いを嗅ぎ分ける。人間の汗、一人や二人では駄目だが十人も寄れば、その匂いは一里も遠方から嗅ぎつけることができる」

「なるほど」

「こうした五官から得たさまざまな知らせを検討して下すのが直感だ。その直感によると、お上人さまの身が危い」

空阿弥陀仏はずばり言い切った。

三

「おぬしもそう感じたか」

「うむ……住蓮どの、何か……」

「じつはわしの方にもこの危惧を裏付ける材料が集りはじめた。今日ここへやってきたのも」

「水無瀬を探ぐって」

「そうなのだ。おぬしが言う待ち伏せ人、その汗の匂いがこちらの水無瀬に立ちこめておる」

「となると、こんどの禁庄は、狩人のただのお遊びではないな」

「そのように思われる。里へ下って、いま少しくわしく事情を調べてみる必要がある」

そこまで言って住蓮は、未だかんじんのことを空阿弥陀仏に問いただしていいのに気づいた。

観音堂を出ようとする山男を声でとらえた。

「そこで空阿。お上人の身に危険が迫って、おぬしはなぜ俗へかえった？ 逃げ出す気なのか」

「逃げる？」

髭つらの眼がけわしく光った。

「その風体なら誰も僧とは思わぬ。引くくられずとも済む」

住蓮は辛辣に言った。

空阿弥陀仏は黙ってワラジの紐を結んでいる。住蓮が戸外へ立ち出てきても口をひらかなかった。

二人は前後して黙々と下山路を歩いた。すでに日没は完了し、足もともおぼつかなくなっている。冷気をふくんだ山おろしが襟首を吹き抜けていった。

今夜の山は雪になるかもしれない。

山麓で里の灯がちらほら見えはじめる地点まできた。

「そんな恰好で歩きまわっていて、お上人の身に万一の

ことが発生した場合、どうやってお守りできるか」

突然、空阿弥陀仏が語気も鋭く言い教った。

「お上人の身をお守りする……」

「そうだ。住蓮どの。おぬしはこそ先に引くくられてしまいうわい。わしはそのことを先ず考えた。だが……」

「だが、何だ？」

「真実、お上人の身をお守りしようと思つての還俗だったかどうか。おぬしがさっき指摘したわし自身に逃げ出す魂胆があつたかどうか……」

観音堂からこの地点まで、ずーっと自問自答をくり返してきたというのである。そして、いまやとおのれの動機が純一無雑だったことに確信が持てたのであった。

「うむ。よくわかった。おぬしという男は、そういう人じゃのう」

住蓮は感嘆をこめた。

たしかに空阿弥陀仏の念仏信仰は純粹であつた。師法然の言葉を全面的に受けいれ、まっしぐらにそれを実践する。信仰をつらぬくためには急進的な行動もあえて辞さなかつた。これを妨害にくる悪僧の群れと、何度か信徒を武装させて闘つたこともあつた。

それが今は、危険の増幅を直感し、身を挺して師法然の身を守ろうと決意したようだった。

「住蓮どの、おぬしもそんな僧衣を脱ぎ捨ててしまったらどうか」

「俗にかえるか。事態によつては……」

それも適策かもしれない。なまじ僧形でいるからこそ既成教団の悪僧どもから指弾されるのである。俗人ならば、どこからも文句は出てこないはずだ。

「あそこだ」

里の集落へはいった空阿弥陀はやがて、ゆくての三抱えもある大ケヤキを指さした。その奥に長老五郎丸の家がある。老人は、過日山の観音堂で逮捕されたまま未だ戻らないのである。

土間に立つと、暗い屋内から夫婦があらわれた。五部丸老人の息子と嫁だった。日中も立ち寄っている空阿弥陀仏の顔はすぐに見分けられた。

「何か知らせがあったか」

「はい。この先、橋下の円（マロウ）が戻ってきた様子だが、うちの爺さまは未だ駄目らしい」

「橋下の円か」

どんな顔の男だったか、空阿弥陀仏も思い出せないらしい。念仏衆の一人であることは間違いない、この前長老ともども逮捕された農夫だった。

とにかくその橋下の家へゆこう、というのを五郎丸息子夫婦が引きとめた。とりあえず腹ごしらえの夕餉を、とすすめるのだった。

「ヒエに芋ズルを炊きこんだ粗末な粥だ。だが空腹には沁みるような美味に感ぜられた。腕をかさねた。

「橋下のマロウとはどういう名じゃろ」

住蓮が誰にとも訊くと、妻女が笑いながら答えた。

「橋下は八兵衛どんと申すお家じゃが、その作男にこの毛のない者がいやして、まるい頭さかい円（マロウ）と呼ばれてます」

「そうか、そのマロウか」

通称しかない下人。

これでは逮捕された経験談もあまり役立つとは思われなかった。おそらく長老五郎丸がしょっ引かれるとき、主人筋の者が自分の身がわりにさし出したのであろう。橋下の八兵衛宅は、五郎丸家に劣らぬこの里では分限者だった。敷地も家の構えも大きい。

あらわれた八兵衛の顔には住蓮も見おぼえがあった。

観音堂の別時会ではいつも先達をつとめる中老の男である。

「おたくのマロウが帰ってきたそうだな」

「マロウ……そんな者、うちにはおりません」

「作男のマロウだ。過日、五郎丸らしよつ引かれただらうが」

「作男ならおりますが、はて……天狗にさらわれてしばらく姿を見せなんだ彼奴のことかな」

住蓮との押し問答に、かたわらの空阿弥陀仏が業（ごう）を煮やした。

「おい、とぼけるのいい加減にしろ、天狗にさらわれたなぞと。その作男、水無瀬の御殿へつれていかれたのであらうが……まあ、いい。とにかくそのマロウに合わせろ」

空阿弥陀仏の威嚇に恐れをなしたか、八兵衛は小声で呟（ささや）くように、

「マロウか誰か知らんが、納屋に作男が一人寝とります。そこへいってごらんなされ。わしは何にも知りよりまへんで」

作男は帰したが、よほど強烈な恫喝をこの引取り人も加えていることが想像できた。これでは水無瀬離宮の眼をかくぐって観音堂へ登ってくる里人が絶無なはずである。

住蓮たちは母屋の裏、馬小屋との同棟の納屋へはいっていった。

「マロウ、マロウはいるか」

土間に立つて叫ぶと、頭上のワラ山が動いてハゲ頭の男が首を出した。

「おぬしがマロウか」

「はい」

「長者の五郎丸たちと何処へつれていかれたんだ」

「御所でござえます」

「水無瀬の離宮か」

意外とこの男、はきはきと答えてくる。住蓮も空阿弥陀仏も御所の秘密が聞き出せそうだと、共通の希望を抱いた。

「拷問を受けたか……役人どもに折檻されたかと聞いている」

「へえ、そりゃひでえ仕打ちでござえやした」(つつく)

二 編集後記 二

○この夏も、暑中の休暇を利用しふるさとへ帰った人は多かった。八月のおはん前後の空港やターミナル・ステーションの混雑ぶりは、例年のこととはいえ、ことのほかであった。帰省列車の満員の程は、二〇〇パーセント、三〇〇パーセントといった具合で、ふるさとへの旅の重さが確かに感じられることではあった。田舎に住む父や母、あるいは祖父や祖母たち。久し振りに帰って、*「タダイマ」*と一言。旅の疲れや真夏の汗も、*「オカエリ」*と暖かく迎えられて、安堵の休らぎを得る。そして旧盆中のことでもあるから先祖のお墓にお参りし、懐しい親戚の人や友だちなどに会って、心睦まじいひと時を過ごされたことだろう。

やっと帰ってきました
長い 長い 旅でした

そして

やっとめぐりあえました
わたしだけの言葉

.....

「タダイマ」

やっとやっと帰ってきました
大切な言葉を 胸に抱いて

これは落合恵子の詩、「タダイマ」『おしやべりな屋根裏部屋』所収。*「タダイマ」*とは本当によい言葉。これに*「オカエリナサイ」*と返ってくれば、もう何もいうことはない。——人生の永くもまたはかない旅の途中、家族や知り合いの人々となごやかに明かるく暮らしたい。

○今月はまた、秋のお彼岸の月。私もまた、亡き祖父や祖母のところへお墓参り。墓前に合掌して、「タダイマ」と一言。久し振りに近況を報告して、しばしの歓談を楽しみたい。

(原 裕)

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十六年 八月二十五日 印刷
昭和五十六年 九月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒103 振替東京八一八二一八七番

発展する浄土宗開教区

「法は人による」

正法弘宣はあなたによって、古来、法は独り弘まるものではなく、人によって弘まるといわれております。

開 教 師 募 集

資 格 浄土宗教師資格取得者(見込み可)
赴任先 ハワイ、北米(ロスアンゼルス)、南米(ブラジル)
のうちの希望地



浄土宗南米別院本堂

詳細についての御照会は——

〒605 京都市東山区林下町400

浄土宗開教振興協会事務局

浄土宗宗務庁内

TEL 075(525)2200(代)